一人前の弁護士になるために

会員　鯖屋 雄大

1　はじめに

弁護士として仕事をはじめて10ヶ月ほどが経過した。あっという間という印象であるが，立ち止まって改めて振り返ると，どの案件においても新しい知識や経験など多くの学びがあり，濃密な時間を過ごせていると感じる。

修習中に諸先輩方から「まずは3年間，頑張ってみよう。そうすればきっと慣れてくる」とアドバイスをいただくことがあった。3年間…長い。鮭であれば生まれた川に戻ってくるほどの期間である。

長いと感じたが，やはり長期間にわたって研鑽を積んでいかなければ，一人前の仕事はできないのだと感じる。弁護士の業務は，高度な専門的知識やノウハウの蓄積が求められ，一種の職人のような性質も有しているのではないかと，実務を経験して改めて痛感する。一人前の寿司職人になるためには，「飯炊き3年，握り8年」といわれるように，プロとして仕事をしていくには，十分な下積みが必要であると感じる。

2　研鑚と研修

私は，多岐にわたる分野を取り扱う設立3年目の小さな事務所に所属している。忙しい上司に対し，細かな知識やどのような段取りが必要であるかなどを確認する時間的余裕はなく，特にノウハウや経験について，自ら調べて取得することは困難である。

そんななかで，このようなスキルを習得するために非常に有益だと感じているのが，当会のクラス別研修である。

クラス別研修では，月1回程度，新規登録会員が約20人のクラスに分かれて，ゼミ形式で，労働事件，離婚事件，交通事故事件，相続事件，借地借家事件などの取り扱うことの多いテーマについて，初回相談から解決までの一連の流れを検討し，案件の見通しや留意点などについて議論する。

研修後には毎回，懇親会が開催され，担任の弁護士や同期と業務の話だけではなく，休日の過ごし方などにも話が及ぶ。

副担任の弁護士は，週末にひとりで黙々と山に登ることで気持ちがリフレッシュするそうで，その弁護士によれば，弁護士の仕事は，さながら登山に挑戦し続けることのようであるとのことである（正直なところ，先輩のこのような格言もよく分からないこともあるのだが，次第にその感覚も理解できるようになるのかもしれない）。

このように，クラス別研修では幅広い分野について，非常に細かい留意点や，担任の弁護士の豊富な経験・ノウハウを教わることができる。毎回，新たな学びがあるだけでなく，自身が取り扱っている案件について相談することもでき，様々な視点からフィードバックをいただくことで，日々の業務を見直すことができる。

研修を通じて，日常の業務で扱っている案件についても，どのように進めていくべきかイメージを膨らませ，見通しを明確にすることができるなど，学んだことをそのまま日々の業務に活かすことができる。また，実務での経験を日々深めている同期から，多くの刺激を受けることができる。

3　おわりに

「飯炊き3年，握り8年」――。1日でも早く，まずは飯炊きができるようになりたいと感じる（弁護士にとって飯炊きとはなんだろうか…）。

とはいえ，飯を炊けるようになるよりも，一人前の仕事ができるようになって，美味しいお寿司を食べたい，と考えながら日々奮闘するのである。